



# 原典「平家物語」を聴く会

第二号 平成十九年・葉月

「平家物語」登場人物伝②

## 平知盛

「たいらのとももり」  
1152～1185  
(仁平2年～文治元年)

「見るべき」

「ほどのことは見つ」

◎利根川 清（早稲田大学高等学院教諭）

「見るべきほどのことは見つ。今は自害せん。」、すでに源平の勝敗は決し、一門の最後を見きわめた知盛は、この言葉をとくに夕暮れの壇ノ浦に入水します。その様は、遺骸が浮かび上がらぬよう鎧二両を着重ね、死なば共にと誓った乳母子伊賀平

左衛門家長と手に手をとってのことでした。敗軍の将として、実にあつばれな最期といえます。清盛の四男として生まれ、その才は清盛も評価するところでしたが、蒲柳の質（病がち）故に、次男宗盛の補佐に任じてきました。将としての活躍は、



以仁王の挙兵の折に総大将に任じられたことにはじまり、近江・美濃源氏の蜂起の際の鎮圧、都落ち以後の勝利の数々など、多くの功績が挙げられます。こう

した事績のため、知盛は平家きつての勇将・知将として、後の文芸、芸能では礎知盛の造形に見るように戦いの人として描かれ、それが定着していきます。

しかし、平家物語ではそうした面とは別な姿も描きます。平家にとつて無残な敗戦の一つであった一ノ谷合戦では、若武者敦盛の死にみるように、多くの若武者が討たれますが、知盛の嫡男知章もその一人でした。義経の奇襲によって、算を乱し潰走する平家軍の中、総大将の知盛一行三人も敵勢に追われ逃れる術を失います。知盛一人が知章と監物太郎の犠牲によって、からくも逃げのびます。知盛はこの体験を「子はあつて、親を助けんと敵に組むを見ながら、いかなる親なれば、子の討たるるを助けずして、かやうに逃れる参つて候ふらん。」、どんな親が、親を助けようとする子を見殺しにして、我が身を助けようとするのかと、自嘆します。総大将の立場である上は仕方のないことといえ、目前で我が子が

殺されるのを目にしながら、それを見捨てて生きのびた

知盛の心は無残です。生きのびた知盛は「我が身の上になりぬれば、よう命は惜しいもので候ひけりと、今こそ思ひ知られて候へ」と人々に語ります。いざわが身となつてみると、自分の命は惜しいものだと思ひ知ること、それが生きるものすべての本源的な性質とはいえ、己の醜いエゴの存在を思い知らされたのです。こうした体験をしてしまった知盛にとつて、「生きる」ことはどのように解釈されたでしょうか。

こうした知盛の思いを考え、冒頭の言葉をもう一度読む時、冷厳に運命を見据えた人物の言葉であると同時に、我が子の死



◆ゆかりの地【甲宗（こうそう）八幡神社】

社務所裏側の山の斜面に平知盛の墓と伝わるお墓がある。以前は、神社裏山の高い場所にあったが、昭和28年の門司の大水害により山が崩れ落ちて、現在地に再祀。甲宗八幡神社の近くでは、お盆になると、この墓から知盛の霊がちょうちんとしてあらわれ（「知盛ちょうちん」といわれる）古城山頂の古井戸に水を汲みに行くという言い伝えもある。

●所在地：福岡県北九州市門司区旧門司一丁目

●交通：西鉄バス「甲宗八幡宮前」下車

の上に生きる残酷な「生」からようやく放たれ、安堵の時間を迎える男のつぶやきと聞くこともできます。余談ながら、北九州市にある門司城跡の甲宗（こうそう）八幡神社には、壇ノ浦合戦のあった日には、麓にある知盛の墓から火の玉が出て、山頂にある古井戸に行くという伝承があります。この話には、いかに供養されようとも、戦さの中に死んでいった者の無残さ、修羅の業火に身を焼かれ、喉の渴きを癒せない知盛の姿を見るように思っています。

close  
up

## 中西和久

KAZUHISA NAKANISHI ● なかにしかづひさ

第十六回「平家物語の夕べ」公演（平成十九年十月二十七日・八日・六本木 俳優座劇場）にて、「宮御最期」「廻文」の章段にご出演いただく中西和久さんをクローズアップ！

九州の炭坑街にあった「キョウラクザ」という芝居小屋で生まれ育ったという生まれながらの演劇人！小沢昭一が主催する劇団「芸能座」で俳優修業の後、八十六年より自作のひとり芝居「火の玉のはなし」をもって全国行脚を始め、「しのだづま考」の演技で九十一年度文化庁芸術祭賞を受賞。古典に新たな息吹きを吹き込み昇華させた、説経節ひとり芝居三部作「しのだづま考」「山椒大夫考」「を



「しのだづま考」撮影：永石秀彦

ぐり考」を筆頭とする卓越した「語り」によるひとり芝居の数々は、多彩な登場人物を一人とは思えない迫力とリアリティーで演じ、観る者の心を釘付けにして感動の渦へとひきずり込む。永六輔、筑紫哲也氏といった演劇通の文化人にも多くのシンプアを持つ、ひとり芝居の極みを見せつける「芸人」である。

## 「ごんべんの話」 ● 中西和久を語る 永六輔

中西くんの舞台はどんなものかと聞かれたら、私は言篇（ごんべん）の芝居って答えるんですよ。これほどごんべんが豊かな芝居はない。まず「話」。客席に話しかけます。そして「語り」りかける。ここで「吾」というか中西くんの主観が入ってくる。彼は昔のものを読みますから「読」が入ってきます。そして「説」きます。地図を説いたり説教を説く。それから「評」。いろいろ批評しますね。これがいろいろ混じって面白いんですが、ところどころに「訛」りもあります。それに「講談」。これは講談そのものです。さらに中西くんは節をつけますから「詠」と「謡」の両方が登場。つまり彼の芝居には、あらゆる芸能の語りの技術が入っている。そしてその全部でこの物語が「論」じられています。

これだけのことができる役者というのは、僕の頭の中では小沢昭一なんです。その小沢昭一の芸風、考え方を見事に受け継いでいるのが中西くんじゃないかと思うんです。これだけ誉めたら、アイツくしゃみしてるんじゃないかなあ。



俳優座公演  
第十六回「平家物語の夕べ」

平成19年  
10月27日(土)  
昼の部 開場13時30分  
開演14時  
夜の部 開場18時  
開演18時30分  
10月28日(日)  
昼の部 開場13時30分  
開演14時  
料金 全席指定 6,000円(税込)  
六本木 俳優座劇場

●演目  
「祇園精舎」  
「宮御最期」  
「文之沙汰」  
「小教訓」  
「副将被斬」  
「廻文」



中西和久



岡橋和彦



緒川たまき

●出演者

中西和久  
岡橋和彦  
緒川たまき  
中村吉右衛門  
(映像出演)

岩佐鶴丈 琵琶  
設楽瞬山 尺八  
横澤和也 石笛



岩佐鶴丈

国立能楽堂公演

第十五回「平家物語の夕べ」

平成19年  
10月11日(木)  
開場18時  
開演18時30分  
料金 S席 8,000円  
A席 7,000円  
B席 6,000円  
(税込)  
東京・千駄ヶ谷 国立能楽堂

●演目  
「祇園精舎」  
「狂言小舞」景清後  
「実盛」  
「小宰相身投」  
「木曾最期」



野村万作



若村麻由美

●出演者  
野村万作  
若村麻由美  
岡橋和彦  
石田幸雄  
岩佐鶴丈

深田博治 地謡  
高野和憲 地謡  
大倉正之助 大鼓  
設楽瞬山 尺八  
藤舎推峰 笛

●チケットのお申し込み、お問い合わせは

原典「平家物語」を聴く会 事務局 (TEL 03-6673-3863/FAX 03-6672-5850)迄、御連絡をお願い致します。

原典「平家物語」を聴く会 入会のご案内

◆会の活動と特典

- ◇舞台公演「平家物語の夕べ」の企画・開催。
- ◇シンポジウム・講演・講義・ワークショップ・イベント等の企画。
- ◇入会申込みの方には公演・イベント等のご案内、会報の送付を致します。
- ◇入会された方には公演・イベント等のチケットを会員特別価格にて販売させていただきます。

◆入会方法

入会金・会費は必要ありません。  
ご住所とお名前、ご連絡先電話番号とFAX(ご利用できない場合は結構です)、Eメール(お持ちの方はお願ひ致します)をご記入の上、次の住所、または連絡先に、ハガキまたはFAXにてご連絡下さい。  
(ご記入いただく個人情報は、原典「平家物語」を聴く会 からのご連絡のみに使用いたします。)

原典「平家物語」を聴く会 事務局

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-10-8 TEL 03-6673-3863 FAX 03-6672-5850



「なつづばき」  
別名:シャラノキ  
(紫羅樹)



●「平家物語」の維盛はいかなる人物だと？  
武將の最期をかつこよく語ればいいのに、まるでかつこよくない。ここを死に場所に定めているのに、いざとなると死ねない。都に残した妻子のことを想うと、うしろ髪を引かれる。ああ死ななきゃ、でも死ねない。いいかげんに

せえよ(笑)っていうぐらいに悩み続けて。妻や子との宿縁も恋愛もすべて断ち切って、ただ弥陀の心にすがればいいんだ、それは解っているけど、でもそう簡単にそんな澄んだ境地に翔んでゆけない。こんな高貴な武將も、ただの人だったんだなあーって。  
●DVD『原典「平家物語」』

維盛出家・維盛入水』にご出演いただいたご感想を？  
役者っていうのは、その時代に生きていた色々な人々を演じるので、「平家物語」

●「平家物語」は共感の文学と呼ばれていて、極限状態に陥った人の話が多く、その極限の中で人はおそろくこういう行動をとるだろうという事がそれぞれ書かれ、これが真の人間の姿なんだろうと感じさせる所が多いですね。  
「人は弱いものだ」これが「平家物語」の底を流れるテーマ

●これからの時代に「平家物語」は、世界的な視点から見ても希有な文学と言われ、琵琶法師が語りで聴衆とやりとりをしながら徐々に作り上げられたもので、その時代の文字の文化と語りの芸能が関わりあって仕上げられているという珍しい形のもですね。  
演者によって余計なものすべて削ぎ落とされて、作者の思惑を遥かに離れて「平家物語」は変化していく、その変化の仕方がとても良かったから、今もなお生き続けているのだと思いますね。

●「平家物語」が持っている力に、その時代その時代でかならず誰かが出会う。例えば世阿弥が能で、三島由紀夫も木下順二も新たな「平家物語」の世界を作っていますね。「平家物語」に出会い感銘を受けた人が、何かやろうとするものなんだと思います。今回僕が出演させてもらった「原典 平家物語」もまさにそうですね。だから、死にま

# インタビュー 私と「平家物語」 死にませんねこれは、 時代を超えて生き続けますね。

しなやかでダンディな魅力を放ちTVドラマ、舞台と精力的に活動を展開。新作DVD『原典「平家物語」』維盛出家・維盛入水』に語りでご出演いただいた近藤正臣さんにお話を伺いました。

語」だってそう遠い世界にあるという感じはしなかったけど、原典をそのまま読むのは難しかったな、仏教用語もたくさん出てくるしね。まるでお経を読んでもみたい気分！私は維盛さんの章段だけを讀んだんだけど「平家物語」全体を読むと登場人物の数がやたらと多いんだね。老いた武將、若き武將、女房たちそして子供。それぞれが個性的で生きざま、死にざまもバラエティーに富んでる。そこが面白い。

●「平家物語」は、世界的な視点から見ても希有な文学と言われ、琵琶法師が語りで聴衆とやりとりをしながら徐々に作り上げられたもので、その時代の文字の文化と語りの芸能が関わりあって仕上げられているという珍しい形のもですね。  
演者によって余計なものすべて削ぎ落とされて、作者の思惑を遥かに離れて「平家物語」は変化していく、その変化の仕方がとても良かったから、今もなお生き続けているのだと思いますね。

## 「俳優」 近藤正臣さん聞く

【近藤正臣 プロフィール】京都市出身。66年、今村昌平監督の「エロ事師たちより 人類学入門」で映画デビュー。69年、人気テレビドラマ「柔道一直線」で主人公のライバル「結城真吾」を演じ大評判を取り、一躍お茶の間の人気者となる。以後TV、映画、舞台と数々の作品に出演。最近では05年に公開された「妖怪大戦争」、06年の大河ドラマ「功名が辻」では、細川幽齋役を演じる。7/19より放送のNHK木曜時代劇「陽炎の辻〜居眠り磐音 江戸双紙〜」に出演中。

「平家物語」は？

「平家物語」が持っている力に、その時代その時代でかならず誰かが出会う。例えば世阿弥が能で、三島由紀夫も木下順二も新たな「平家物語」の世界を作っていますね。「平家物語」に出会い感銘を受けた人が、何かやろうとするものなんだと思います。今回僕が出演させてもらった「原典 平家物語」もまさにそうですね。だから、死にま